

91 江戸後期における病氣見舞と医療情報交換について

ウィリアム・エヴァン・ヤング

プリンストン大学東アジア研究部

近世後期において病氣とは社会的及び文化的なイベントであった。誰かが病氣になると、その親族や知り合いが病人宅を訪問するという事は、習慣的に行われていた。この病氣見舞という習慣によって病人宅が人や情報の集まる場所になり得たのである。多くの場合、数日の間に数十人の見舞客が一つの家を訪問することは稀ではなかった。この頻度、人数は祝儀的なイベント、例えば結婚、出産などと同様であると言っても過言ではない。

まず近世の病氣見舞に関する史料を紹介する。病氣見舞時においては、進物の交換が最も重要であったといえよう。そこでまず、病人と、その家族がどのように見舞客の名前と、見舞の品を書物に記録していたのかをみていく。特に全国各地の文書館には病氣見舞帳と言うものが多く保存されており、その普遍性を物語っている。

しかし、本発表の主題として、病氣見舞という文化的な習慣と情報交換の関係について焦点を当てたい。この多くの人々が、一病人宅に集まり、病状や治療法に触れると言う事は、医療に関する情報を交換する最適なトピクスであり、機会となった。見舞という、病氣の文化的な側面の考察を通して、近世の家族がどのように医療情報を集めたのかというテーマを洞察し、論じていきたい。

病氣見舞という現象は様々な近世日記や家庭記録に見ることができるが、この発表では特に有名な読本作家である滝沢馬琴(1767-1848)と馬琴の長男宗伯(1798-1835)の嫁であった滝沢お路(1806-1858)の二人の日記を取り上げ、幾つかの例を詳しくみていく。当時滝沢家は江戸という大都市に住んでいて、馬琴は『南総里見八犬伝』など多くのフィクションを生み出している。人気読本作家でありながら、彼の多作性、多才性は日記という、ドキュメントにおいても日常的な生活を詳しく描くという点において、精彩を放っている。馬琴の跡をついで、嫁であるお路がその役割を受け継ぎ、豊富な日記を残した。馬琴とお路の日記には医療に関する記述、病氣見舞のエピソードが詳しく記されている。そこに見えるのは病人の症状に応じて適当、適切な治療方法を薦めているたくさんの見舞客の様子や姿である。

繰り返し述べたように病氣見舞は当時の家と家の関係を保つ為の社会的習慣であると同時に、医療情報の交換という医療や治療のため重要な機能を果たしていたと思われる。親族や友人が病人宅を日々訪問している間、社交的なネクサスが生じ、最適な情報交換の機会となった。ある意味、病氣見舞という習慣の本質は病氣そのものというより社会的な繋がりを保つための行為だと言えるが、一方でこの二つの日記を読むと見舞客との情報交換で得た情報は病人やその家族にとっての治療方法に対する意思決定の大事な一部であることがはっきりと分かるのである。なぜ、医者だけでなく、見舞客の薦めた治療方法がそれほど信頼を得ていたのであろうか？幾つかの理由が考えられるが、当時の病氣見舞という習慣自体が病人宅以外の様々な人々のそれぞれの経験を取捨選択する事を可能にしたと考えられよう。ある治療法で快復した見舞客自身がその治療法の有効性を証明していた。それに、江戸のような大都市では多種多様な治療選択があり、信頼できる知り合いのアドバイスを選別出来たのである。この、見舞と人と人との交流という文化的な側面が医療における重要な決断と具体的に繋がっていることが分かる。